

特別講演

主催 国際医療センター 消化器内科

後援 医学教育センター 卒後教育委員会

平成22年7月26日 於 国際医療センター C棟2階会議室

特殊光を用いた消化管癌の内視鏡診断

大澤 博之

(自治医科大学 内科学教室 消化器内科部門)

消化管内視鏡の技術革新はこれまで胃癌や大腸癌など消化管癌の診断・治療に大きな進歩をもたらしてきたが、近年登場した特殊光観察法は新しい内視鏡診断法として注目を集めている。

内視鏡的粘膜下層剥離術をはじめとする内視鏡を使った腫瘍の切除術が開発され、食道癌、胃癌、大腸癌は早期に発見されれば低侵襲な治療が期待できる時代になったが、これらの癌の早期発見は必ずしも容易とはいえなかった。そこに近年NBIやFICEといった特殊光による新しい内視鏡検査法が登場した。

FICE(Flexible spectral Imaging Color Enhancement)システムはRGB画像から被写体の分光反射率を推定し特定の波長情報を利用することで、通常ではわかりにくい病変の特徴を際立たせる特殊光観察法である。もう一つの特殊光観察法であるNBI(Narrow Band Imaging: 狭帯光観察)が拡大観察を併用することで最大の機能を発揮するのに対し、FICEは通常倍率でも明るい視野が得られるため、遠景で消化管全体を見渡すような観察が可能で、特に病変の拾い出し診断に有用であると考えられる。検診などの内視鏡検査にFICE

を用いることで早期癌の発見率を上昇させる可能性がある。最近では苦痛の少ない内視鏡検査として、鼻から入れる内視鏡(経鼻内視鏡)が広く行われるようになったが、経口の内視鏡とくらべて解像度が低いため診断能は低下すると考えられている。しかしFICEは経鼻内視鏡で用いても効果があるため、経鼻内視鏡にFICEを併用することは診断能向上に有効と考えられる。

具体的な病変の診断に関し症例が呈示された。早期癌の発見には粘膜模様的大小不同を観察することが重要である。治療法の決定に必要な癌の粘膜下層浸潤の有無の診断には、FICEで腫瘍内の太い血管の有無を観察することが有用である。また癌の発生母地とされるバレット食道の診断は困難な場合が少なくなかったが、経鼻内視鏡でも、FICEを用いればバレット食道が明瞭に観察できる。さらにバレット腺癌の上皮内進展や、癌と腺腫の鑑別、良性潰瘍と癌の鑑別、小腸腫瘍などの診断にも有用である。このようにFICEシステムは、これまで困難だった様々な病変の診断に有用であることが示された。

(文責 消化器内科 新井 晋)